

光明堂（国指定の重要文化財）



元禄 14 年（1701）に建立された旧本堂で、寛保 2 年（1742）と明和 5 年（1768）の改修を経て、安政年間（1856 年）新本堂（現釈迦堂）の建立にあたり「明王堂」から「光明堂」と改め本堂の後方(山上)に移築、さら昭和 39 年（1964）大本堂建立のとき現在地へ移されました。本尊には真言密教の教主である大日如来が安置されています。建物は桁行五間（約 9 メートル）梁間 5 間で、屋根は入母屋造棧瓦葺です。組物は三手先を詰組とし、軒は二軒の繁垂木としています。安政年間の移築の際に回り縁と外陣部の床を撤去して吹放しの土間とし、珍しい形になっています。また彫刻装飾（島村圓鉄の作）には、創建当初の構造がよく残され、江戸時代中期における密教寺院の遺構の一つとして貴重な建物です。また「明王堂」の掲額は東大寺の別当道恕上人の筆、柱の聯（現在成田山霊光館保存）は三井親和の筆になります。 「堂内には自由に入ることができます」

堂内に奉安されている仏像（不動明王 不動明王 大日如来 愛染明王）

愛染明王

衆生が仏法を信じない原因の一つに「煩惱・愛欲により浮世のかりそめの楽に心惹かれている」ことがあるが、愛染明王は「煩惱と愛欲は人間の本能でありこれを断ずることは出来ない、むしろこの本能そのものを向上心に変換して仏道を歩ませる」とする功德を持っている。愛染明王は一面六臂で他の明王と同じく忿怒相であり、頭にはどのような苦難にも挫折しない強さの象徴である獅子の冠をかぶり、叡知を収めた宝瓶（ほうびょう）の上に咲いた蓮の華の上に結跏趺坐（けっかふざ）で座るといふ、大変特徴ある姿をしている。もともと密教における蓮華部の敬愛を表現した仏であるためその身色は真紅であり、後背に日輪を背負って表現されることが多い。



縁結びの絵馬

星供祈祷会 (ほしくきとうえ)

(毎年2月3日から9日)

*成田山では、「星供祈祷会」を毎年2月の節分より7日間光明堂にて行い、除災招福と開運成就をお祈りした「星供御守札」を授与しております。

薪能 *光明堂前の特設舞台にて**成田山薪能**が上演されます。 (5月第三日曜日の前の日9)



明王堂の掲額

東大寺別当道恕上人揮毫



正面左右にある霊鳥カルラ

阿形・吽形がある

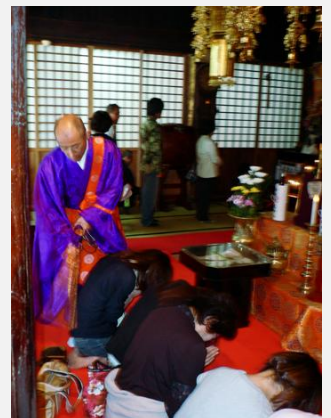


天国 (あまくに) 宝剣頂戴

インド神話に登場する神鳥ガルダ・カルラ 英語では「ガルーダ」

天國の宝剣頂戴 (7月第一週の週末金、土、日)

天武天皇(てんむてんのう)の御代に、刀工**藤原天国**に命じて作らしめたので「天國の宝剣」と言います。「天國の宝剣」はご本尊不動明王の靈徳と共に、不思議な靈徳を表し、古来より「宝剣頂戴」と称して、この宝剣のお加持を受けると速やかに病気を治し諸々の魔障を除き、息災延命が得られると言われています。普段は、御内仏殿に奉安されています。



刀工の天国(あまくに)が製作した刀

宝剣”は、歴代の天皇が常に玉座のそばにおいて御守として身を守っていた靈劍ですが、大本山成田山が開山したきっかけでもあります、「平将門の乱」平定の為に、朱雀天皇が寛朝大僧正に、京都高雄山神護寺の不動明王(成田山のご本尊)と共に授けた成田山第一の靈宝です。

この“天國の宝剣”について、「此の宝剣を拝する時は、乱心狂気もたちどころに止み、熱病寒疾も速やかに癒え諸々の魔障を除き、息災成就を得る」と伝えられております。

そんな宝剣、普段は奥殿に秘蔵されていますが、毎年7月の祇園会の3日間とこの御開帳期間の1ヶ月間は、光明堂に安置し、どなたでもこの**宝剣でお加持が受けられます**。

またこの「天國宝剣頂戴」を行っている光明堂の裏手にある、奥之院も御開帳、開扉されている。

天国(あまくに)は、奈良時代または平安時代に活動したとされる**伝説上の刀工**、またはその製作した刀のことを指す。

天国は**日本刀剣の祖**とされるが、その出身、経歴には謎が多く、大宝年間の大和の人とも、平安時代後期の人とも言われ、諸説あるものの、**実在の人物であるかどうかは定かではない**。天国の作と伝承される作として、平家一門の宝刀として著名な「小鳥丸」(こがらすまる)(皇室御物)があるが、無銘であり、実際の作者は不明である。また、その製作は奈良時代まではさかのぼらず、日本刀が直刀から反りのある湾刀へと変化する平安時代中期頃の作と推定されている。なお、亀戸天神社の宝剣も天国の作とされ、こちらには「一度鞘から抜き放せば決まって豪雨を呼ぶ」という伝承が残されている。